

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩展 土着と風土」

70年にわたる画業の曲折のなか、特に戦後から1970年代の変遷のうちに根付いた“土着”の考え。「洪水」（1965）、「濃霧地帯」（1971）、「群れ」（1977）など小川原が表現した“土着と風土”を中心に紹介します。

会期：開催中～7月10日（日）

■企画展示

「嶋貫由紀子展 Flower kings 花の王さま」

オーストリア在住の美術家・嶋貫由紀子さんの個展です。何気ない日常の中での驚きと愛情に満ちた視線が生み出すファンタジックな世界。クレイペイント、エッグテンペラ、リトグラフなど多彩な技法による表現も魅力です。

会期：開催中～7月10日（日）

アート・イベントのお知らせ

■ロビー・コンサート

「おことのコンサート 翠（みどり）の風～ゆれる箏（こと）の音（ね）」

日時：6月4日（土）14時～15時

演奏：金石 澄子さん（箏奏者） 会場：当館ロビー 入場無料

■土曜サロン

「小川原脩とシュルレアリスム3 日本のシュルレアリスム（超現実主義）と小川原脩」

日時：6月18日（土）14時～15時

「ミュージアム・シネマ ハーブ&ドロシー2 ふたりからの贈りもの（アメリカ・2013年・87分）」

日時：6月25日（土）14時～15時30分

いずれも

講師：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

小川原脩記念美術館技法体験ワークショップ
クレイ・ペインティングに挑戦！



4月30日、嶋貫由紀子さんが講師となり、倶知安の土と卵を使って絵の具を作り絵を描くクレイ・ペインティングを題材としたワークショップを行いました。普段体験できない技法を学び、子どもも大人も時間を忘れて思いのままに描いていました。



小川原脩記念美術館 倶知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時

（入館は16時30分）

6月の休館日

7日、14日、21日、28日

美術館長から

山あいのこの小さな町に、一つの文化が確かに息づいている。しかも、それは倶知安という地域的な境界線を越えて世界に拓けている。今さら、国際的などと口に出すのが気恥ずかしいほど、「国際化」は日常化しているのだ。そもそも文化や美術に境界などはない。小川原脩でさえ晩年になってから、ひよいひよいと何度もアジアへ取材旅行に出向いていてはいないか。そう言えば、現在美術館で紹介している嶋貫由紀子さんも、ニュージーランドでの制作活動を皮切りに、現在はオーストリアを拠点としながら、フランス、イタリアにもアトリエを持つという国際派だ。世界の中の倶知安、そんな時代の風を実感している。

館長 柴 勤

海と山と田園とーミュージアムロード情報ー

【クローズアップ】

西村計雄記念美術館おやこで楽しむ展覧会「キミならどう思う？」

西村計雄（油彩画）、山岸正巳（油彩画）、前川茂利（写真）の想像力と創造力と記憶を刺激する作品を紹介。描かれているのはどんな場面？よく見て、かんがえて、お話ししよう！

会期：開催中～7月10日（日）

■西村計雄記念美術館 ☎ 0135-71-2525

■木田金次郎美術館 ☎ 0135-63-2221

■有島記念館 ☎ 0136-44-3245

■荒井記念美術館 ☎ 0135-63-1111

感動一点 の場

『馬と人と犬と』

1975 年 小川原 脩 画



馬の大きな体が画面いっぱい、いや、脚や尾、たてがみは完全に画面をはみ出して描かれている。首、腹、臀部はなめらかな曲線。脚は蹴り上げた蹄だけが見え、頭を振り下げたその横顔は歯をむき出しにして食いしぼり、力の限り後ろ足を跳ね上げる格好となっている。

この激しい動きの馬に跨る人がいる。表情や衣服は描かれずシルエットのみ、年齢や性別といったものは見えてこない。ただ純粹に人という存在である。荒々しい馬を力で抑えることも、必死にしがみつくこともせず、自然と力を抜いてその身を任せているように見える。

犬2匹の流れるように大地を駆ける姿も加わり、しなやかな肉体と軽快な動きが際立つ。余分な描き込みを最小限までそぎ落とした馬、人、犬。それぞれの緊張と弛緩のバランスが躍動感を感じさせる。1975年、小川原脩64歳の頃の作品である。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

ふる探訪 さと

—鳥のさえずり—

399 回

さまざまな草花が周囲を彩り、野鳥のさえずりが満ちる。爽快な空気と相まって、北海道に住む幸運を感じる。自然は北海道の大きな魅力で、中でも草花や野鳥のさえずりへの人々の関心は高い。

さて、どうして野鳥たちはさえずるのだろう。理由は簡単。繁殖のためである。ライバルである同種のオスに対し、ナワバリを主張するためにオスがさえずる。その一方でメスに対しては愛を誘いかける。「ここに素敵な相手がいますよ」と。さえずりについて、ある研究者がこんなことを報告している。野鳥は特に早朝にさえずる傾向が強い。その理由として、早朝のさえずりをメスが伴侶を選ぶ際の目安にしているからだという。というのは、多くの野鳥は身体が小さいので、そもそも消費するエネルギー量が多い。寝ている間にも消耗し続けているので、目を覚ました時にはすでに空腹でクタビレかけている。そのような状態で大声でさえずるのである。つまり、朝一番のさえずりは健康



研究の題材になった「メジロ」。町内では旭ヶ丘でよく姿を見かける。
(flickr Photo Sharing より)

で体力があって初めて可能な過酷な重労働なのだ。体調を崩していたり、体力が弱まっていると、目覚めの後にオスがまずすべきことはエサ探しである。そうしなければ生きて行けないからだ。そして空腹を満たした後にさえずることになる。メスはそのことを十分に理解しているので、タイミングを逃した後のさえずりはメスの関心を引かない。そしてそのようなオスをメスは選ばないという。

ノンキにさえずっているように見えるけれど、実はオスはメスの厳しい評価の目にさらされている。メスは自分と子供たちを養うだけの体力をオスが持つかどうかを、声の張りや長さ、そしてタイミングから見極めるのだ。要するに、大自然はメスの目を通してオスを選別している。オスを見るメスの目は、言わば神の目、その判断は神の審判。

文：岡崎 毅（倶知安風土館館長）